

氏 名	平井和明 ^{ひらいかずあき}
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第 16 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 17 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者 看護学研究科看護学専攻
学 位 論 文 名	犯罪被害者の特性と受診行動に関連する要因についての研究 Personal characteristics among victims of crime and the factors related to medical consultation to doctors
指 導 教 員	影山隆之 教授 石田佳代子 准教授
論文審査委員	主査：高野政子教授 副主査：川崎涼子准教授 ・ 小嶋光明准教授

論 文 内 容 の 要 旨

【背景と目的】

犯罪被害者の中には、医療のニーズがありながら受診できない人が多いが、その受診行動の要因に関する研究は少ない。病院受診した被害者を対象とした調査はあるが、受診に至らない人（犯罪被害者の暗数と呼ばれる）をも対象とした調査は行われていない。後者も含めて受診行動に関連する要因を明らかにできれば、犯罪被害者の受診促進対策の検討や、犯罪被害者の身体・精神・社会的健康の保持増進の一助となる可能性がある。そこで本研究では、犯罪被害者が医療機関の受診を躊躇する要因を明らかにする目的で調査を実施した。

【方法】

犯罪被害者の受診行動には、被害者を受け入れる医療機関側の要因と、被害者本人の要因が影響していることが考えられる。前者については文献調査を行い、後者については被害者を対象としてインターネット調査を行った。インターネット調査は被害者への侵襲が小さく、二次被害を与える危険が比較的少ないからである。調査内容は、被害の深刻さと被害類型、受診行動の実態と被害者の個人特性、医療機関受診の有無、及び医療機関受診を躊躇する要因である。被害の深刻さは改訂版出来事インパクト尺度日本語版(IES-R)で評価した。受診行動に関連する可能性がある個人特性として、困難な状況でどのように対処することが多いか（コーピング特性）をコーピング特性簡易尺度(The Brief Scales for Coping Profile, BSCP)で評価し、援助を受けることに関する抵抗感の少なさや肯定的態度を被援助志向性尺度により評価した。受診を躊躇する要因は先行研究から 22 項目を例示し、回答を因子分析に基づき尺度化して、下位尺度得点を求めた。これらを説明変数とし、受診の有無を目的変数とした stepwise 多重ロジスティック回帰分析を行って、受診行動に関連する要因を検討した。

【結果】

受診行動に関連する医療機関側の要因としては、少なくとも 4 つの阻害要因（スタッフに係る要因、患者に係る要因、物品・環境に係る要因、連携に係る要因）の存在が、先行研究において示唆されていた。

他方、犯罪被害者自身へのインターネット調査では、回答者 1093 人中、58 人（5.3%）が犯罪被害後に医療機関を受診していた。受診を躊躇する要因として 4 因子が抽出され、そのうち特に「二次被害への不安」「他者への不信」は、得点が高いほど受診しにくい傾向にあった。ただしこれらは、被害の深刻さ(IES-R 得点)やコーピング特性とも相関があった。多変量解析の結果、被害の深刻さ（IES-R 得点の高低）によって、病院受診行動と関連する要因は異なっていた。このうち被害が最も深刻な群(IES-R40 点以上)では、受診の必要性に確信がもてる人、BSCP の「解決のための相談」「視点の転換」得点が高い人、及び「気分転換」「回避と抑制」得点が高い人ほど、病院受診を選びやすいことがわかった。

【結論】

犯罪被害者の受診行動には、効果的なスクリーニングツールとその実施環境（物的・人的）が重要である。また、被害の深刻さに関わらず被害者のコーピング特性に影響されている可能性があるため、コーピング特性や二次被害への予防策を踏まえて、適切な犯罪被害者対応や支援体制の整備、健康教育（個人特性と受診行動の関係を加味した）等が必要と考えられる。

Abstract

Background and Aim:

The medical needs of many victims of crime (hereafter, victims) are often unmet, although few researchers focus on its background. Some researches are concerning those who went to a doctor, but not dark number. It is useful to clarify the background for the purpose of improving consultation for the victims and promoting their health. The author therefore conducted a survey to investigate the reasons why victims are reluctant to visit medical institutions.

Methods:

Based on a literature review, an internet survey was conducted to reveal the relationship between the consultation behavior and the personal feature. The applied questions were as follows; whether a respondent made medical institution visit, 22 possible reasons to hesitate to see medical institutions, the severity of damage in terms of the Impact of Event Scale-Revised, type of crime, coping profile in terms of the Brief Scales for Coping Profile and the Help-Seeking Behaviors Scale. Stepwise multiple logistic regression analysis was performed to extract the variables related to medical consultation behaviors.

Results:

According to previous literatures, medical consultation behaviors were affected by four factors in medical institutions: factors related to the staff, the patients, environment, and coordination with other institutions. In the internet survey, only 58 (5.3%) among 1093 respondents visited medical institutions after receiving injuries due to a crime. Personal background to hesitate to seek medical help was summarized into four factors. Among them, anxiety for secondary damage and distrust of others were related to actual behaviors for medical consultation. Multivariate analysis revealed that factors related to medical consultation depended on the severity of victims. Among the most severe group (IES-R 40 point or above), confidence of needs for medical consultation and two BSCP subscales (consultation for problem solving and change of point of view) positively correlated with medical consultation behaviors, while other two subscales (changing mood and avoidance/suppression) negatively did.

Conclusion:

Effective screening tools and implementation medium are important for victims' consultation behaviors. Since the behaviors of victims may be influenced by their coping profile regardless of the severity of the damage, it is important to take both of the coping profile and preventive measures against secondary damage into consideration.

論文審査の結果の要旨

わが国では、毎年 100 万件の犯罪が発生しており、犯罪被害者は報告数よりも多いという法務省・厚生労働省等の報告を受けて、平成 16 年に犯罪被害者等基本法が施行されたが、犯罪被害者の個人特性や受診行動については、犯罪被害者への二次的被害を避けるために未だ研究報告がないという研究背景がある。

本研究は、筆者が看護師の経験から犯罪被害者が身体的・精神的な健康障害だけでなく、問題が重症化して受診することや、被害者の医療体制に疑問を持ち取り組んだものである。犯罪被害者の受診行動の実態調査は二次被害の侵襲性が低い Web 調査法を用いた。その結果、犯罪被害後の受診は 1 割に満たず、受診行動を妨げている 4 つの要因と、犯罪被害者のコーピング特性と受診行動の関連を示した新規性の高いデータを明らかにした。犯罪被害者の個別の特性に着目して受診行動を促進する対策を検討する上で意義のある研究である。

本研究では、犯罪被害者に対応する医療体制への提言には至っていないことは今後の課題と考える。

副論文

- ① 平井和明 (2017) : 救急医療で活用される IPV screening tools に関する文献検討.
フォレンジック看護学会. 3(2). (inpress)
- ② 平井和明 (2016) : 犯罪被害者における医療機関受診の躊躇とコーピング特性との関連.
こころの健康 31(2). P63-P72.